

子どもの思考を活性化する板書研究

—社会科授業における探究過程の可視化を目指して—

戸田征男 米田 豊 岩本 剛 吉崎雄貴 畑 和馬 宜野座剛

1 問題の所在と研究の目的

教育現場では、板書計画は重要とされている。それは、板書計画こそが授業計画となるからである。しかし、それと同時に板書は子どもとともに作るものである。授業では、子どもの思考に沿った形で板書は形成されていく。子どもは、板書によって思考を整理したり、深めたりする。つまり、子どもの探究過程が可視化された板書こそが、子どもの思考を活性化する上で重要な役割を果たす。

社会科の授業には、二つの探究過程があるⁱ。一つ目は、「分かる過程」である。社会で起こっている諸事象を「なぜ疑問」で問い、社会事象間の関係・関連を「原因と結果」で明示した説明的知識として理解させる学習過程である。二つ目が、「考える過程」である。社会的な問題に対して、「分かる過程」で習得した説明的知識を活用して事実の分析的検討を行い、意志決定させる学習過程である。

本研究では、「考える過程」での意志決定場面における子どもの思考を活性化するための板書の在り方についての考察を行う。

本研究の目的は、次の二点である。

- ①意志決定場面での子どもの思考の構造を明らかにすること。
- ②子どもの思考を活性化するための板書のあり方について明らかにすること。

2 社会科授業における意志決定場面での子どもの思考

意志決定場面では、子どもは既有知識をもとに、事実の分析的検討を行う。この事実の分析的検討の構造と、そこで行われる子どもの思考を、認知心理学や教育哲学の研究成果をもとに明らかにした。

意志決定場面では、まず、現状がどのような状態であり、どのような問題があるのかという「問題把握」をする。そして、論争問題のように、「○○すべきかどうか」という二者択一の問題では、それぞれの「解決策の吟味」を行う。その「解決策の吟味」をふまえて、「解決策の選択」をする。ここで、特に重要となるのが、「解決策の吟味」である。まず、それぞれの解決策を選択すると、どのようなことが起こるかを「未来予測」する。この解決策の「未来予測」を、他の解決策の「未来予測」と「比較」する。「比較」することによって、それぞれの解決策の「メリット」「デメリット」を明確にする。このようにして行われた事実の分析的検討を踏まえて、最終的に、どちらを選択するかを決めさせる。このような探究過程を踏まえることで、子どもの合理的意志決定能力を育成することができる。

3 板書による意志決定過程の可視化を意図した実践

本研究では、第6学年「わたしたちのくらしと政治」での実践を行い、分析検討を行った。

本実践では、子どもに身近な事例である、校区を通る予定の都市計画道路を取り上げる。都市計画道路の建設予定地には、現在多くの住宅が建っている。また、建設するためには、多くの費用が必要である。伊丹市の財政のしくみや市議会のはたらきなどを学習した上で、校区を通る予定となっている「都市計画道路を計画どおり造るべきか」を考えさせる。習得した知識を活用して事実の分析的検討を行い、意志決定させることを意図した学習過程である。

(1) 目標

校区を通る都市計画道路を造るべきかどうかという問題について、習得した知識を活用して事実の分析を行い、根拠のある自分の考えをもつことができる。

【思考・判断・表現】

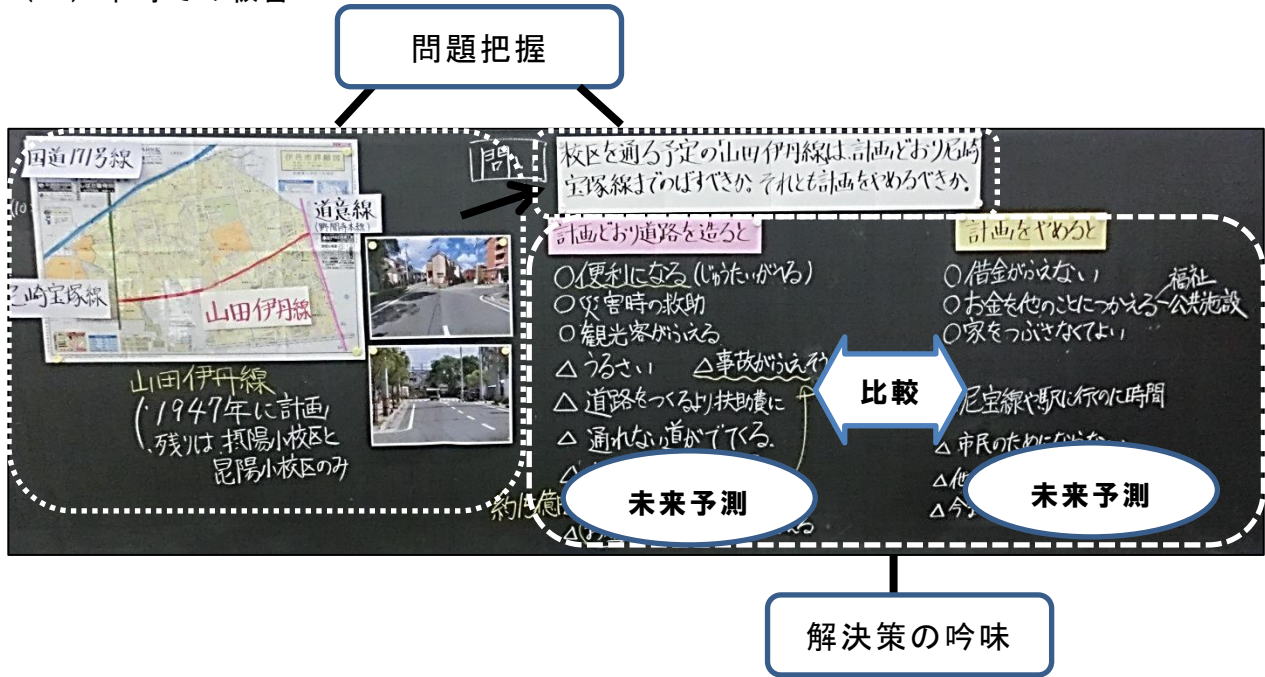
(2) 本時の展開

	学習活動	○主な発問 ◇おもな呼びかけ	予想される 子どもの反応	指導上の留意点	*資料☆評価
問題把握	山田伊丹線が、尼崎宝塚線まで延びる計画があることを知る。	◇この道は、阪急伊丹駅のあたりから、尼崎宝塚線までつなげる計画があるのです。	・まだ途中なんだ。	・地図をたどらせることによって、道路が途切れている場所があることに気づかせる。	*校区の地図 *都市計画道路整備計画図
解決策の吟味	山田伊丹線を延ばすことによってどのようなメリット、デメリットが起きるのか、未来予測する。	○計画どおり延ばすと、どんなメリット、デメリットがあるのか。また、計画をやめるとどんなメリット、デメリットがあるのか、ワークシートに書きましょう。	・救急車や消防車が通りやすくなる。 ・お金がかかる。 ・やめるとお金を他のことに使える。 ・道が狭くて危ない。	・それぞれの選択肢のメリット、デメリットを板書することによって、子どもが「比較」して考えられるようにする。	*伊丹市の財政状況

校区を通る予定の「山田伊丹線」は、計画どおり尼崎宝塚線までのばすべきか、それとも計画をやめるべきか。

解 決 策 の 選 択	最終の自分の考えをプリントに書く。	○最後に、自分はどう考えるのか、ワークシートに理由もつけて書きましょう。		・○○するならば△△を選ぶという決め方でも良いということを知らせる。	
----------------------------	-------------------	--------------------------------------	--	------------------------------------	--

(3) 本時での板書

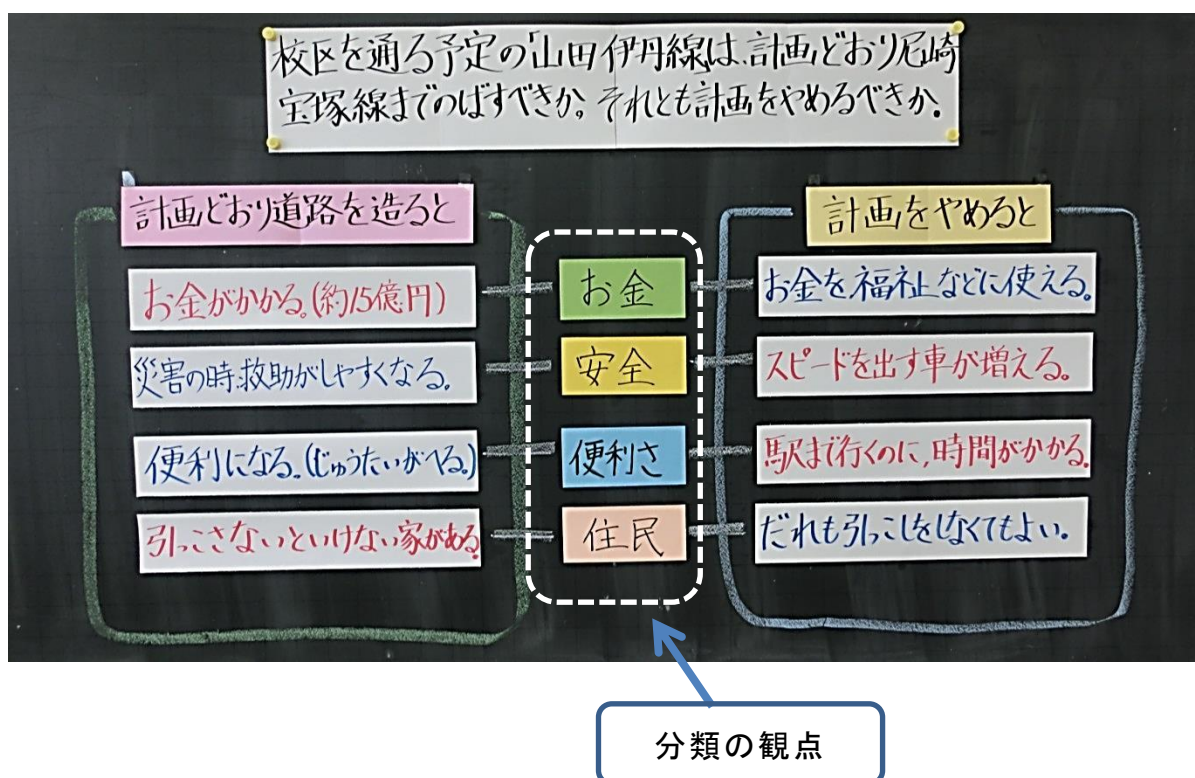


4 結果と考察

本実践では、子どもは単元で習得した知識を活用して「未来予測」を行うことができた。しかし、「比較」が十分に行えなかった。それは、「比較」の対象が明確になっていなかったためである。実践では、子どもの意見をそのまま板書していった。そのため、それぞれの「未来予測」の観点が散らばってしまい、「お金に関してはこちらの方が良い。」「安全に関してはこちらの方が良い。」といった、それぞれの解決策のメリット、デメリットが見えにくい板書となっていた。それぞれの解決策のメリット、デメリットを明確に見える板書とするためには、「未来予測」を「分類」することが必要であることが分かった。そこで、板書の改善案を作成した。改善の視点として、次の三点を設定した。

- ① 未来予測を、観点ごとに「分類」する。
- ② 後から「分類」が行えるように、子どもの意見（「未来予測」）を、カードに書く。
- ③ 「分類」の観点がわかるように板書する。

【改善板書案】



5 成果と課題

本研究の成果は次の二点である。

- (1) 認知心理学や教育哲学の研究成果から、社会科授業の探究過程である「考える過程（意志決定場面）」における子どもの思考の構造を明らかにすることができた。
- (2) 子どもの探究過程（「考える過程」）を可視化することができる板書の作成をすることができた。

本研究の課題は次の二点である。

- (1) 子どもから出てきた未来予測が本当に正しいのかを、単元で習得した知識や資料から検証する必要がある。その検証方法と、資料とのつなげ方については明らかになっていない。
- (2) 「分かる過程」における子どもの思考を活性化するための板書については明らかになっていない。

【註】

- ⁱ 米田豊編著『「習得・活用・探究」の社会科授業&評価問題プラン 小学校編』明治図書 2011.6 に詳しい。